

【表紙のきり絵】

「三鷹の朝」

金子 徳好

「アメリカはベトナムから手をひけ」と書いたゼッケンを着けて通勤一人デモを始めたのは1965年4月5日だった。

この数日前の会議で事務局と酒を飲みながらベトナムへの北爆について論じあっていた時、「よし、俺はゼッケンを着けて抗議するぞ」と宣言してしまい、みんなから「さすが、事務局長！」と拍手を受けたため、後に下がれなくなったのである。

家は渋谷区初台で、四畳半一間で4人家族はあまりに狭く、たまたま人を介して三鷹に空き家があるのを知って、すぐ引っ越しを決意した。引っ越しのトラックの上で小学校4年の長男から「三鷹に移ってもゼッケンを続けるの？」と聞かれ、困ったことを憶えている。

三鷹の家はこんもりと繁った森をくぐって歩くところにあった。その道を自転車に乗って通勤し駅前の自転車置き場において中央線に乗るのが通勤の経路だが、森の中で近所の人達と出会い、みなゼッケンを見てびっくりしていた。

静枝は1968年春のアンデパンダン

展でこの風景を「三鷹の朝」と題して20号ほどのきり絵にして出品し、多少話題になった。

その後、この絵はハガキ大にして、ベトナム人民支援募金をもらった時の領収書として持ち歩いた。また、この絵は婦人団体連合会の会長榎田ふきさんがベトナムから招待された時に持参し贈呈した。私たち夫婦にとってはいろいろなことを思い出す絵である。

(かねこ・とくよし、元日本機関紙協会理事、著書に『ゼッケン8年』朝日新聞社刊)

金子 静枝

1965年から73年までの8年間、我が家はベトナム反戦のゼッケンホームだった。

子供たちは、お父さんは毎朝、お母さんが作ったゼッケンを着けて会社に行くものだと思っていた。次男は保育園まで自転車に乗せてもらって通園した。この絵はその光景である。3年目から、募金箱を首から下げているのでカンパの領収書がわりの絵ハガキにして渡し、支援カンパ500万円にもなった。

(かねこ・しずえ、きり絵作家、市民の意見30の会・東京会員)

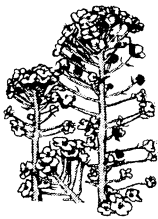
るようになる、そう思ったので、昨年はいろいろなデモに一人で参加。でも、この団体にも属さない心細さも味わいました。この集まりを計画してくれた河村さんに敬意と感謝をささげます。一緒にチラシも配ります。集会も声かけて下さい。

新百合ヶ丘でこのような集まりが開かれたことを喜んでいました。」
前の戦争では、国家の号令で一億玉砕の道を歩きました。今度は騙されないぞと思っていた筈です。ところが、『あたらしい憲法のはなし』は、憲法が公布されて十カ月後の昭和

二二年八月、中学一年社会科の教科書として、文部省の手で発行されたのですが、僅か三年で姿を消したことを知りました。当時は親や身近な人を亡くし、戦争を肌で感じていた時代です。書物にも飢えていました。この多感な子どもたちと教師もともに学び、平和憲法を叩き込んでいたらと思うと残念でなりません。朝鮮戦争が始まった頃より、アメリカの日本に対する態度は変わり、軍事同盟国としての要求を突きつけてき始めました。日本は言いなりに要求を受け入れ、なし崩し的に自衛隊という軍隊に成長し、基地はいたるところに存在しています。戦争は嫌だ！この気持ちはどなたの心にもあります。では、ここまで追いつめられたのはなぜでしょうか。
集まりの最後に発言された方の言葉は、「戦争をすると言ってくれば分かり易いけれども、正義の旗を掲げられるから分かりにくい」

本当に深く考えさせられる言葉で会を閉めさせていただきました。未熟な私で足りないところだらけでしたが、皆様のおかげで、集まりを实らせていただき、ありがたく思っております。

(かわむら・すみこ、川崎市在住。83歳)



【書評】

戦争は国家の専管事項ではなくなくなった

——軍隊を鍛えなおすことまでやる民間会社——

P・W・シンガー著『戦争請負会社』(NHK出版)

井上澄夫

冷戦構造が崩壊したとき、つまり冷戦が終わったとき、これで人類は核戦争から解放されると安堵の胸をなで下ろした人は無数にいたろう。また二一世紀が近づくとつれ「戦争の世紀」だった二〇世紀が終わり「平和の世紀」が実現することを心から願った人びとは世界にあまたいたに違いない。しかしそのような期待や切望は、残念なことに今やことごとく打ち砕かれている。私たちはどうしてこんな時代に生きているのだろうか。

本誌の書評欄でかつて高橋武智氏が千田善著『なぜ戦争は終わらないか——ユーゴ問題で民族・紛争・国際政治を考える——』(みすず書房)を紹介した。同著で千田氏は「民族が違うからといって自動的に戦争が起るのではない」「戦争には起る仕組みがある」と強調し、「『撃て!』と命令する人がいないと戦争は始まらない」「戦争は人間が起こすものである。人間といっても庶民ではなくて、政治家が起すものである」とのべている。しかし戦争を求めるのは政治家だけではない。死の商人・軍需産業も戦争でもうけるが、最近ではそれとは別種の新興企業群が登

場し、戦争をビジネスにしているという衝撃的な事実を暴露しているのが本書(著者はアメリカ人政治学者)である。

冷戦の終焉は、大量の職業軍人と膨大な量の武器が市場に放出されるという事態をもたらした。その結果どういことが起きたか。近代国民国家においては国家が軍隊を独占し戦争は国家の専管事項だった。「だった」というのはその事態が変質し始めているからである。「本書は、軍人という職業の公的独占が現在失われてしまっていることに焦点を当てている」。市場に放出された軍人と兵器は、戦争と深く関連する専門的業務を売る営利組織たる「民間軍事請負企業」(PMF=Privatized Military Firm)が活用することになった。PMFは戦闘作戦、戦略計画、情報



収集、危険評価、作戦支援、教練、習熟した技能などを提供し、南極大陸を除くあらゆる大陸で

働いている。政府が軍事を外注化すること、軍事の民営化はすでに世界の潮流になっている。

軍事や戦争を古典的な概念で考える人は、まさかと思うかもしれない。しかし九一年の湾岸戦争で米軍は米国のPMFに大いに依存した。それ以来米軍は急速に軍事の民営化を進めている。著者は言う。「情報戦の問題や戦場の支援だけではない。兵器のテスト、空中給油、F-117ステルス戦闘爆撃機やB-2ステルス爆撃機の高度に技術的な維持管理など、今はみな民間の仕事である。最高度の戦いを実行するのに必要な兵器システムは非常に複雑になりつつあり、たった一つの米国防部が作戦を行なうのに異なる五つの会社が必要になることも多い」。本書はPMFが諸国の政府や反政府勢力の依頼によって軍隊を貸し出したり、脆弱な軍隊を教練で鍛え直して戦況を転換させた例をふんだんに紹介している。最高レベルの米退役軍人を多数抱え、米国防総省と密接なかかわりを持ち、米軍が介入を禁じられている多くの状況で米軍に代わって国際的活動を引き受けているMPRI社など軍事請負業界の大手などの輪郭も描かれている。

決して読みやすくないが一読に値する。類書に本山美彦著『民営化される戦争——二十一世紀の民族紛争と企業』(ナカニシヤ出版)がある。